原題：茜の受難

名無しの権左衛門

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼女たちは、とある村の住人だった。

そんな時、彼女達の住む村が所属する国が戦争を開始。

個々に決められた最低徴兵数があり、彼女達が住む村は規定に達していなかった。

そこで徴兵された彼女達。彼女らは、第２３師団５番兵団に所属することになる。

（満蒙同化政策第二世代）

目　次

1：北の村にて　1
2：結月とは　5
3：神とは　8
4：伍を組もう　11
5：開戦　20
6：大本営にて　26
7：戦う気持ち　28
8：撤退　33
9：作戦結果　37
10：束の間の休息　41
11：威力偵察　44
12：会議室　48
13：縁と紲の神子　52
打ち切り：独逸にて　56

1：北の村にて

「気を付け！　番号！」
「1！」
「2！」
「3！」
……
「798！」
「声が小さい!!」
「798!!」
「次！」
「799！」
……

ここはとある訓練場。
この訓練場では、来るべき時のため国民一丸となって敵国への尖兵となる準備を進めている。
尖兵として男子は剣道、女子は長刀を習熟してもらうことになっている。
そう、基本的には。
しかしこの訓練場は少々異質で、女子にも剣道をさせており本物の銃を持たせている。
男子と差のない訓練により、ほとんどの女子は音を上げてる。
「声が出せるってことは、まだ疲れてないってことだ。今から走り込みだ！
15キロ川辺を走って来い！」
「「はい」」
男子や丈夫な女子は、そのまま走っていく。
しかしこのような事に適正のない子は、走ろうとしてもこけてしまう。
「おい、立て。立ち上がれ。帝国軍人は、このような事で音は上げんのだ！」

「ひいっ」
まだ子供な彼女は、上官が地面に打ち付ける竹刀で地面がえぐれるのを見て怯える。
「葵っ！」
「お姉ちゃっ……！」
「軍人たるものが、一人で立ち上がれないでどうする！」
葵という子の姉が、彼女に近づこうとすると周囲にいる女子に羽交い締めにされ、
他の上官に走り込みをさせられる。
そして葵の姿やほかのくたばっている女子を見て、上官は葵以外の女子に近づく。
上官である彼は、手にもつ竹刀を女子の尻に突き立てる。
「テメェら、休憩するな！戦場は甘くねぇぞ！わかってんのか！
今立ち上がらない奴は、便衣兵か従軍慰安婦にさせるぞ！」
「そ、それだけは……」
「やだ、いやだ……」
立ち上がる者もいるが、青いだけは立ち上がれない。
教官ではない上官のいびりに、腰が抜けてしまったようだ。
だがそんなことを知らない上官が、葵に近づく。
「とりあえず、お前は俺たちの宿舎に連れていく。ヤれ」
「「はっ」」
「やだっ、イヤアアッ!!」
髪や手足を握られ、屈強な上官の部下が口元をゆがめて自らの宿舎に連れて行く。
その様子を走り込みをしている周囲の兵士である男女の目に、深く焼き付けられる。
そして上官のいう事が嘘ではないという事を、後日にて見せつけられた。
葵を含め上官複数が、宿舎から出てこなかったのである。
だが更に後日、葵は服役した。
「お姉ちゃん！」

「葵！」
長官に連れてこられた葵は、一人鬱になっている姉である茜を見ると一目散に駆けだした。
勿論茜も葵を見ると、一気に表情を明るくさせ彼女と抱き合った。
限られた、夜の休憩時間。
そこに葵を連れてきた人物が、彼女たちの邂逅に時間を見計らって水を差す。
「ちょっといいかな？」
「あ、え？　えと、あの、妹を助けていただいて」
「うん、その事も含めてなんだけど……」
茜は眼中になかった長官を確認すると、すぐに頭を下げて感謝と謝罪をしようとする。
でも長官は気にしていないといって、微笑む。
「君たちは明日から、僕の指揮下に入ってもらうことになるんだ。
申し遅れたね。僕は、伍長の結月ゆかり。よろしく」
「よ、よろしくお願いします」
夜なので大きな音は出せない。
しかし勲章を胸につけている長官が、じきじき部屋に来たことにたいして
少なからず衝撃を受けている。
「と、まあ、僕は忙しい身なので、これにて失礼するけど……。
葵さんは何もされていないから大丈夫だよ」
「本当に、ありがとうございます……！」
涙ながらに感謝をする茜を見て、結月は大事ないように、と微笑んだ。
そして入口にいた部下と共に、この宿舎を去る。
頭の両側に長く伸ばした紫色の髪を結ったものを流しており、それがたなびくと良い匂いが周囲に流れる。男性と思えないその魅力に、葵はもちろん茜も興味が引かれた。
今日も辺境であり、最前線の訓練場での日々が終わる。

ここは、満蒙開拓団という名の同化政策にて送り込まれた日本人が住まう最西端の村。
この村は不憫にも、過激派の関東軍の息がかかった軍団長が送られている。
尊王攘夷なんて、全くのくそくらえ。先軍思想に塗れた者の巣窟だ。
厄介なことに天皇を無視しておきながら、選民思想に拍車がかかり日本人ではなく帝国軍人こそが至高と考えている。
おかげで大陸の軍事関係において、関東軍が好きかってやっている。
その為、帝国男子が圧倒的権力と優先順位を持っている。
逆に一番低いとすれば、その土地の人間……ではない。
忌子とされる、帝国と大陸の子、日系満蒙人である茜や葵ら第二世代なのだ！
つまり異常な仕打ち男女の仕分けがないのは、そういうのが理由である。
このような組織の崩壊・分離が起こってしまった国家の行く末はどうなるのか。
見ものであるな。

2：結月とは

「結月ゆかりさんかぁ」
「なんか、かわいかったよね」
葵と茜はあの後も、ずっと男女共同の訓練を強いられていた。
しかし結月の顔を思い出したり、彼の配下になるという自信がある。
この自負を背負う事で、常に前向きになれた。
そして前向きなる事で、ただの弱い女の子であることはなくなった。
来るべき日の半年前。
そこでは今まで私利私欲を働いていた上官が、宿舎にて訓練を受けていた兵士全員を広場に集めさせていた。
「あー、本土から編成案内が来ている。
流石にこれに逆らうと、俺の天下がなくなっちまうからな。
今から読み上げる！　前方に伍長がいる!!（俺から見て）左から読み上げていくので、名前を挙げられた者は、そいつについていけ！
疾く動かねえと気合注入してやっからな!!」
これを言われると、嫌でも気が引き締まる。
静寂な雰囲気になり、視聴覚悟が決まる。
だが全ての兵士がそのような心構えになる前に、上官が早口で読み上げる。
早口過ぎてどうにもならん！
誰もかれもそう思っているとき、上官に向かって何者かが声をかけた。
「師団長。何をしている」
「……何のつもりだ、結月」
そう、伍長の結月ゆかりだ。
彼があの上官、師団長を止めた。
「俺のいう事が聞けねぇのか、軍法会議にかけるぞテメェ！」

「天皇陛下直筆の場合、どうなるか。君もわかっているんじゃないのか？」
「……後で本部に来い」
「リンチはごめんだね。でも、僕はこの通り見た目だけはいい。ソレでゆるしてくれないか？」
師団長は結月に刀を突きつける。
彼はそんなこけおどしに怯まず、ちゃんとした道理を突き付ける。
それは正論ではない。
「はあ？　俺は好色家だが、男色じゃねえんだよ！　ちっ、最初から読んでやるよ。
帝国軍人に再度読んでもらえる事、感謝しろ！」
「「おおおお!!」」
兵士たちが師団長の訂正を初めて聞いたことと結月に対して、盛大な謝辞やらなんやら歓声が轟く。
師団長は元の位置へ戻っていく結月をにらみつけながら、ゆっくりと大声で指示していった。
師団長。後藤中将は、大の男尊主義であり、選民主義者である。
帝国は他国を照らす巨大な太陽である。全ての中心であり、全てより強くなければならない。
そのため自分と同じ、男であり帝国軍人であり本土出身でなければ、発奮行事という粛清をすることも厭わない。
更に異性であれば、男の奉仕をすることは当然と考えている。
別にこの考えはいいのだが、生殺与奪、命や行動そのものは帝国軍人が指導しなければならない、なんて考えを持っているので非常に危ない。
そして結月ゆかりは、伍長といいながら実は監査を兼ねた『特務機関』の密偵である。
更に師団長である後藤中将とその周辺以外は知らないが、彼自身伍長ではなく大佐の階級を隠し持っている事を知っている。
最後に、高級士官のみが知っているのは、結月ゆかりが『縁結び』の『現人神』だという事。

「では、僕は愛すべき『小隊』の下へ行こう」
「いけしゃあしゃあと……！　今に見ていろ、ほえ面をかかせてやる……！」
上官は呪詛をつぶやき、結月の背中を見送った。

3：神とは

最西端にて、軍備が整いつつある今、島根にて重大な会議が始まっていた。
今日は神無月。いや、神在月。
出雲大社にて、神々の会議が行われている。
八百万―数百の神々が邂逅するには小さな本宮だが、この中には神々によって作り出される本来の空間―高天原―がある。
そこにて日本帝国で唯一の神は、そこに参上しなければならない。

「来たか、『人の神』よ」
「はい……今年も招いていただき、誠にありがとうございます」
「よいよい。皆、この国を守るものだ。そんなに堅くならなくてもよい」
「は……」
かしこまる『人の神』に、『大国主』も頭を掻いた。
「さて、頑固者が集まったな。では、方針を決めよう」
一年に一度の祭事であるこの日。大名行列もかくやという人々が、出雲大社に参拝しに来る。
ご利益を受けに来たのもそうだが、普通に神様に特別なそなえものを持ってきた者もいる。
神様はどんなに傲慢なものでも優しい者でも受け入れる。
そして出雲大社や靖国神社が穢されなければ、ある程度許される寛容性を持っている。
しかも供え物も、ごみであろうと石や命であろうと、日乃本のものであればなんでもよいのだ。
神はそこにいる。それを噛みしめ、感じる者がつくりだした物。
その成果を楽しみにしている神々であった。
「『人の神』よ。この国の子らに対して、どのように思う」
「私はいつもの通り、すべての国民が自身を想い、常に生きるため目的

を果たせるそんな国であることを願います」
「『人の神』よ。いつもの常套句だな。それを２９８７年続けているのも、驚きのものよ。
うむ、そうだな。今、この国に足りないものを言ってみよ」
「……」
その目は自分如きが言ってもいいのだろうか、という畏怖の感情を孕んでいる。
恐怖を前面に押し出した表情に、神々は大きく笑う。
「うずうずしているものもいる。言ってみよ」
『人の神』は、意を決して言う。神々は温厚なれど、気性の荒い者もいる。
もしも、という事のため、事前に国会で話し合ったことを話す。
「は、世界は『国際化』というものに向けて歩みだすでしょう。
その結果、国民の皆様が『神』を忘れ、他国へ流出し『神の血』をも薄めさせてしまうでしょう。それを防ぎたいのです」
「つまり、神々とのつながり、『縁』の酷薄化……か。うむ。
では、神々として、この『日乃本』を『日乃本』であれるよう、国際社会を歩める『縁』へと変貌させよう」
『大国主』は、後方にいる『日乃本』を作った母や父に、土下座をして頭を下げる。
「お父様、お母さま。『日乃本』は、『縁』を強く求めております。
どうか今年も、『人の神』とその子らに祝福を……」
「「……」」
国に降りてきた八百万の神々も、同じく高天原にいるその『やんごとなき神様方』にお願いをする。
そして、少しの静寂の後。
「任せるぞ、『正和天皇』。いや、『神武天皇』」
「は……。拝命仕ります……」
臣下の礼に似た手拝を行う。
そして、『大国主』は、『正和天皇』の後ろに立つ。
「さて、皆さま。今年。いや、来年再来年と、『日乃本』が千代に八千

代に永遠［とわ］に、永久［とこしえ］に続きますよう、皆々様お手を拝借！」

そういうと、手拍子と『楽器の神』・『音の神』・『琴の神』などが一斉に音楽を鳴らす。

これは古より伝わる神々の音楽であり、高天原の音楽である。

そして４曲歌った後、最後にうたわれるのは『君が代』。

神だけの世界ではなく、〝人の世〟になったことを意味する重要な〝うた〟。

その調べは独特でも雅楽でもなく、人が歌いやすいようにしたもの。

近代から現代にかけて修正されて使われるようになった、あの『君が代』と同じである。

そして神々の祭りは始まった。その始まりと共に、人もやんややんやと踊りだす。

神道・仏教、他宗教も混じっては人として歩む。

４：伍を組もう

神無月が終わると、各地にいる『現人神』は神々との『縁』が強くなったことを感じる。感じない者もたまにはいるが、大半感じ入り人々に恵が振り分けられた事を知る。
『縁』は強い繋がりを示すようになった。
だが、それは、かつての戒めとして、始まりとして奉られた存在を叩き起こすことになる。
ソレは遺伝子となって紡がれた彼らの中にいる。
ソレがいつ表になるかはわからない。それでも、潜在的な脅威は今でも、彼らを蝕んでいる。そう、それが良いとも悪いとも関係なく、ね。

「小隊長？　結月小隊長！」
「……はっ。僕はどうしたんだっけ」
「いま、配下の皆さんと会議中ですよ」
「そうだったね」
結月は気を取り直して、３０名ほどの配属された兵士を見渡す。
そこには彼が声をかけた、茜や葵もいる。
彼女たちは朦朧としていた彼を、心配するような目で見ている。

結月ゆかりに配属された１００名は、全て最西端の村で出生した第二世代の子供たちばかりだ。
勿論、彼ら彼女らを自身の下に集わせたのは、日系人の保護という名目の他にもある。
関東軍の選民主義により、下手に犠牲を出されて困るのでその監査と正当な血筋を
持っている満蒙人を守る為である。
満洲帝国や蒙古国には、かつての中華の王朝と共に逃げ延びた人がいる。

その中には、劉氏や明・清を作ってきた由緒正しい血脈が流れている者もいる。
彼らを保護するのは、中華人民にとって大きな希望と共に満蒙国民の結束を強める力がある。
今中華は、軍閥制に変化しており各地が群雄割拠状態に変貌している。
かつての王朝の血脈の効果は、階級が上位になるほど効かない。
しかし古代の人物を奉っている者や過去の恩恵にすがる者にとって、王朝の名を保持するというのは精神的に絶大な効果がある。
中華は血脈など気にしないという感じがあるが、それは天下騒乱となっているとき。
今は比較的安定している。
よってこの時をどのようにしのぐかが見ものである。

そして実際に取った手は、というと……。
権威や血筋を利用せず、そのまま敵国の王朝として末代にわたるまでの粛清だった。
流石にこれはあかんということで、君主主義の人達が急遽保護に回ったのだ。
これらの結果、『現人神』である『縁の神子』、結月ゆかりが配属されたわけだ、
「僕は君たち、王と共に歩めるのはうれしい限りだよ」
彼と隣にいる側近は、眼前にいる王の末裔たちに微笑みかけた。
今は日本人と混ざってしまって、日系人となってしまった。
そして同化政策によって、苗字を与えられた。
その過程で大半の家庭が、日本の苗字または新たな苗字だらけになってしまった。
日本は過去とのつながりを重んじる。
しかし、新たな大陸での生活ということで、気持ちを一新させる願いを込めて苗字を変える者もいた。
だから変な苗字がいたりする。

「ったく。なんで私が補給兵やらなくちゃいけないんですか。私は工兵がいいって、あれほど……」
「まあまあ、きりちゃん。落ち着いて」
「ちっ、ずん姉が言ったから黙っといてやりますよ」
一人不良がいるみたいだが、姉妹なようで姉が妹を抑制した。
実際に配属先が変更になったものが多く、少々不満が出ているが特別な小隊なので我慢してほしいと結月は思っている。
「えーと、東北きりたんさんでしたね」
「なんかようですか」
腕を組んでいかにも、嫌そうな態度と目つき。
「貴方だけなんですよ、戦場で上手にレーションつくれるのは」
「レ……なんですか、それ」
「保存食ですよ」
結月はこの希望配属先に行けなかった子供たちのための言い訳を作る為、
彼ら彼女らに対して言いくるめようと子細すべてを見て特徴を調べた。
「貴方たち東北姉妹は、保存食に必要な発酵菌をどこからか連れてきて、食料を改良しているのです。
酵母菌・納豆菌……いろんな有用な生物をね。それを補給兵となって発揮してもらいたいんだ」
「う……むう、『現人神』にお願いされたら、断れるわけないじゃないですか。卑怯です」
ふくれっ面を見せるが、怒っている様子はない。
寧ろうれしいようで、この後姉と喜色を表し喜びを表現していた。
結月による小隊編成は、滞りなく進む。
「小隊長である僕の指示は、戦場では絶対となる。だから、絶対守ってね。
それと君たちは貴重な人材だ。あまり前線に行かないよう、出来るだけ後方になるように打診してる。
でも君たちは兵士でもあるんだ。いつでも出撃できるよう、心構え

をしていてほしい」
人を殺すという覚悟と殺されるという覚悟。
そして長時間の戦闘によるストレスフルな環境変化。
様々な条件を超えなければ、生き延びるのは難しい。
「次に兵士たちに頼むのは、伍を作ってもらう事なんだけど……」
この『特別小隊』は、補給兵5名、軍医2名、偵察兵が3名・支援砲兵が10名の他残り80名兵士になっている。
80名の兵士の中で30名が騎兵で、50名が山岳兵となっている。
結月が伍組を作ろうとしているので、20組出来上がる。
彼らを使う事で戦術的な動きができるのだ。
伍は中華が大昔から使ってきた戦闘形態の呼称である。
ツーマンセルやスリーマンセルよりも、実に戦闘に対して柔軟に動ける。
流石に個人が扱える戦闘の間隔が広くなってきた近代において、伍よりもスリーマンセルが役立つことが多い。
しかし中華は山ばかり。平野でもないので、伍というのは注意を四方八方へ飛ばすことができるので実に有用なのだ。
「私はお姉ちゃんと組みたいな！」
「うちも葵と一緒がいいんやけど……」
伍に関しては仲の良い者を組み合わせる。
能力が均等になってもいいし、特化を作ることもいい。
しかしここでは仲良し組を作ることで、戦場のストレスを少なくしようと計画している。
「うん。僕は反対しないよ。一緒に戦える戦友を探してみて」
結月の友好的な姿勢に、茜達は笑って仲間探しをする。
ただその仲間はすでに決まっているようだ。
同じ村、集落の幼馴染。
「コウ君！　一緒に戦おうよ！」
「俺と？　あいにくだが、俺は軍医だ。向いてないぞ」
「でも一応戦闘できるんだよね？」

「まあ、そうだけど」
「じゃあ、うちらは仲間やね！」
　茜と葵の強引な誘いに、村で一番かっこいい水無瀬コウはぶっきらぼうに振ろうとした。
　しかし兵士として共に戦うには、色々癖がわかっているような奴がいないと行動が読めない。
　読めなければ結果、自身の命を失ってしまうかもしれない。
　だからコウは癖を知っている彼女たちの誘いを受けたのだ。
　コウは両手を琴葉姉妹に握られ、次の仲間探しに向かわされる。
　次の標的は、同い年で一番性徴と成長が早い子だ。
「あ？アタシと一緒にヤりたい？　別にいいけど、邪魔すんなよ」
「邪魔なんてせぇへんよ。うちらはマキちゃんと、一緒に戦いたいだけや」
　茜の誘いを受けているのは、弦巻マキだ。
　成長が早く身長も高い。力も戦闘訓練で上昇し、同い年で一番力と体力がある頼れる子供だ。
　彼女は支援砲兵の兵科になっているが、そんなこと知ったこっちゃないといわんばかりだ。
「肝心な事忘れている二人に行っておくが、伍長が必要だからな？」
「あ」
　水無瀬コウの一言に、茜が固まる。
　そう、仲良しこよしだが、この４人は次の五人目を伍長にしなければならない。
　しかし周囲はほぼ決まっている。
　残っているのは、ごく一握り。
　そんな時だった。
「伍長なら私がやりますよ」
　琴葉姉妹はその明るくはきはきとした声でしゃべる人の方へ、首と共に体も向ける。
　そこには厚着のコートを着た、大人びた人物がいた。
「あ、アンタ、誰なん？」

「申し遅れました。私、結月ゆかりが双子の弟、『紲　あかり』です。『絆の神子』をやってます」
「あ、『現人神』がなんで、うちらに……？」
「残った一人ですよ」
　残った一人と言っているが、本当は嘘。
『現人神』は優秀な人物が多く、各戦線・方面にて引っ張りだこな人材。
　そんな人物が此処に来たというのは、結月と同じ理由である。
　そして紲は結月より踏み込んだ任務についている。
　それは至近距離にて、彼らとの接触を安全の確保をするためである。
　実際であれば師団長ができるレベルで指揮が可能。
　更に『現人神』の能力もついて、身体機能も抜群である。
　おかげで、十二分に彼ら彼女らを、自身の守備範囲内に収める事が可能なのである。
「皆、伍を組めたようだね。それじゃ、その伍での戦い方をこれから習熟させていこう」
「「はい！」」
　彼らはとある日まで訓練にいそしむ。
「って、マキちゃん、その野戦砲どこから持ってきたの!?」
「アタシがあの納屋から引っさげてきたんだよ。誰も使わねぇなら、文句ねぇよなぁ？」
　実にガラの悪いマキは、驚く葵に野砲を見せる。
　彼女が言うように、その砲台は誰も使っていない。
　自分のモノは自分のモノとして、ジャイアニズムが光る！
「アタシはこいつを使って戦争するぜ。いいよな？」
「俺は別に気にしない。銃剣突撃にて制圧するだけだからな」
　銃弾の詰まりがないように、整備をしているコウ。
　軍医なのに非常に戦意が高い。
「えーと……？　茜ちゃんと葵ちゃんは、どんな感じに仕上げようとしてる？」
　紲……彼は、残り二人の戦法を見て今後の戦術に役立てようとす

る。
「うちらは、クロスファイアっていうのを、やってみようと思っとんよ」
「主にお姉ちゃんと私が交互に威嚇射撃している間に、徐々に前進していくの。
そして敵がお姉ちゃんの射撃や私の威嚇に怯えていたり、気を取られるの」
「そんでそのうちに、うちらが相手の側面をついて手榴弾や鉛玉をお見舞いするんや」
二人の戦法は山岳と森が多い中華大陸に対して、非常に有効打になりうる戦術として評価される。
これを連隊にて行えば、非常に戦況が優位になるだろう。
先鋒をおとりにして包囲しに動けば、幾分か楽になる方法だと思う。
彼はそう思いながら、この伍の戦術を考えた。
「それじゃ、基本戦術から行くね。
ゆかりの小隊戦術は、砲兵による面制圧と煙幕による視界遮断を敢行。
そのあと銃剣騎兵の突撃で、それと共に歩兵の突撃になってる。
状況に使い分けるんだって。
それで、支援砲兵でもなんでもないマキちゃんの砲弾規格は、こっちで更新することにしたよ。
変に使用期限が過ぎていると使えないからね。
それで私達伍の基本戦術は面制圧と琴葉姉妹による威嚇射撃中に、私とコウ君が突撃することになるよ。
基本的につかず離れずがいいんだけどね」
笑顔での作戦立案。訓練はきついが、暴力だけでない理性的な内容。
実に納得のできる内容なので、誰もがついてきた。
この訓練によりマキは、中国産の野戦砲を縄付きで引っさげて砲撃を食らわせるという

前代未聞な荒業を取得した。
これには結月の支援砲撃手もびっくり。
ほかにも軍医が人間の急所の場所を教えたりして、確殺または身動きを封じる戦闘を心掛けさせようとする。
効果のほどはわからないが、小隊の皆は肝に銘じるようだ。
「皆さん、昼食ですよ～」
「ちなみに残しやがったら、糞尿の中に突き落としますよ」
補給兵の東北姉妹が登場。
良い匂いがするのと同時に炸裂する東北妹の弁舌。
いつも通りの言葉に、皆は笑う。
「な、なに笑ってんですか、気持ち悪いですよ」
男性陣からもらうにやけ顔に、彼女は鋭いメスを入れる。
昼食に関していうと、この村でとれたものや都市部から運ばれたものばかり。
新鮮な野菜や魚類が、きちんと調理され皆の口に運ばれる。
良い味付けと味覚、食感などいろんな刺激を楽しめる。
そんな素晴らしい食事にありつける小隊は、常に戦意が高い。
戦場では美味しいごはんが娯楽である。
ほかにも色々あるが、一番健全なのがこれ。
まあ施設がなければ、一番難しいのもこれであるが。
「おいしかった～。ごちそうさまでしたー」
「ごちそうさま～」
「すっげぇ旨かった。ありがとな、きりたん」
「此れのために毎日を頑張れる。だから自信を持てよ、東北姉妹」
葵・茜・マキ・コウは、東北姉妹に聞こえるように言う。
「全く……余計なお世話ですよ」
「きりちゃん、よかったね」
「……」
いやいやながらも仕事を褒めてもらえたきりたんは、嫌味を言うが照れていることがまるわかり。
茜達以外からも褒められて、きりたんは自分の仕事に自信を持つよ

うになった。
さて片付けだが、食器はそれぞれが洗うのだ。使い捨てにできる資源などないので、本土でつくられた陶磁器などを使っている。
奇麗な器ばかりだ。
このようなものも、士気にかかわるので最前線では真っ先にこのようなものを支給している。

この後、小隊は上官の兵と共に、要塞にて防衛線の練習をする。
更に配属される戦線も、その時に発表されるのだ。
うかうかしてはいられない。
しかしいつか戦場にて、死ぬかもしれないのだ。
今はこの束の間の休息を、戦友と共に駄弁ろうじゃないか。

5：開戦

それは突然起こった。
盧溝橋事件。
関東軍がやらかしてしまった地獄への切符だ。
これはすぐに日中両陣営に知らせが入る。

「何!? 誰だそんなバカな事をしたのは！ すぐに召喚し、中国に謝罪するぞ！」

「奇襲攻撃だと!? 宣戦布告をしない日本鬼子共め。戦の準備じゃ！ 支度はできているな、出撃せよ！」

大陸側で陸軍の力が大きくなってしまったが故に、発生してしまった今回の暴走。
謝罪どころでは済まされず、結果的に最悪な方向に向かってしまう。
国共合作。
中国共産党と国民党が手を取り合って、各地方の軍閥と共に日本を迎え撃とうというものだ。
しかしこの最中、重要な事が中国側でも発生する。
それはファルケンハウゼン含む軍事顧問団が、ドイツに召喚されてしまうのだ。
大きな目で言うと、そんなに大事ではないかもしれない。
しかし局所的にみると、それは大きい。ドクトリンという戦闘の基礎のような部分を、
後の部隊に教える事ができないのだ。
最近はやりの電撃戦や塹壕戦ができない。
これは大きな痛手である。
しかもただでさえ中国は強大で、先ほどまで軍閥で分かれていたと

いう位色々ばらばらだ。
戦闘どころか歩兵装備すらない者もいる。
ここらの後方支援や補填・充足度に関して、全く知らないところもある。
昔の義和団事件のように、農具や古代中国で使われた近接武器・弓矢があればいけると思うところすらある。
「仕方ない。連合国の支援を受けている中国と対等に立つため、枢軸国としてドイツの陣営に入ろう」
「やむなし、でございまする」
これにて、戦争が開始されることになる。
大本営は関東軍の上級将校の召喚と関東軍以外の将校を、中国国境にいる兵士たちの上官として配備する。
だがそれはとてもじゃないが、時間がかかってしまうこと。
馬鹿をしていない陸軍のみで、やらなければならなくなった。

そんなこんなバカをしてくれたおかげで、最前線は混乱に陥れられる。
「よし、関東軍の力を見せてやれ！　あ？招集？バカ言ってんじゃねえぞ」
「大本営からの指令だ。従わなければ、軍法会議で極刑に処す」
「ちっ」
最西端の村の後藤中将も、今回の事件の影響をもろに受けた。
三時間ほどで解放されることになるが、時すでに遅し。
この時すでに、中国共産党が蒙古国の国境を食い破ってきたのだ。
その猛攻はすさまじく、中将のいなくなった師団は撤退を余儀なくされた。
そして蒙古国は二つの市を失うことになる。
その市は、蒙古国が本土より命令を受けていた、最大級の要塞が築かれている場所である。
混乱した師団は残りの市の要塞に立てこもり、中将以下の将校が奮闘することになる。

旅団や連隊が、共産党に奪取された要塞と同じ要塞を構える場所にて、
適度に侵攻戦と防衛線を行う。
おかげで敵をくぎ付けにすることができた。
だがそのくぎ付けにできたのは、毛沢東と長年流浪した屈強な兵士たちである。
しかも山岳兵だ。歴戦の兵士と将校の１７師団を相手に、中将がいない５９師団が相手になるのである。
更に敵は蒙古国最大で最強の要塞に引きこもっている。
これがいつまで続くのか不明だ。
だがこれを打開する可能性を秘めた部隊がある。
『特別小隊』。
血筋的にもかなり重要度が高い、満蒙開拓団第二世代が徴兵されている部隊。
この部隊は単独では何もなしえない。
しかし束になってかかれば、全てを打開できる力がある。
だがここは戦場だ。
彼らが束になっても勝てないかもしれない。
戦術的勝利はなくとも、軍とは一つではない。
よって戦略的な勝利を導ければそれでよいのだ。

「敵襲……っ、敵襲ーー!!!」
「何!? 『小隊』、全軍東へ撤退しろ!」
小柄で強靭な足腰をしている馬に乗った偵察兵が、『特別小隊』全員に聞こえるよう大きな声で叫んだ。
夜襲ではなく、真昼間。
訓練をしていた小隊は、全員荷物を纏め撤退の準備をした。
「急いで逃げるぞ。銃剣騎馬隊は、周囲の索敵だ。奴らが回り込んでいる可能性もあるからな」
戦闘になると結月、彼の口調は変化する。
それは効率的に言葉を回すためだ。

騎馬隊に指示を仰ぐと、彼らは周囲へ散開していった。

「アタシが後方を見る。茜達は先へ行くんだ」

「だめだよ、マキちゃん。貴方の方が重装備なんだから、ここは私に任せて」

殿役を請け負うとしたマキに、紲が代役をするという。

流石に上官なので、首を横に振れない……振れないよね？

あ、こいつ、振りやがった。

「あかりさん。アンタは測量をしてほしい。わかるよなぁ？」

イラついた表情をするマキの言い草に、なんの不快感を示さないあかりは明るくうなずいた。

「わかった。じゃあ、威嚇斉射は任せるね」

「話がわかるじゃねぇか」

後方にはすでに赤い旗を持つ兵士が、ぞろぞろと来ている。

「試射はしたことあるんだよなぁ？」

「うん。って、訓練の時にしたでしょ？」

あかりは伍組全員で、マキの野砲を扱えるよう特訓したことがある。

万が一は確実に来るのが戦場。

だからやっておいて損はない。

しかも野砲自体要塞に沢山あるので、砲撃手がいないとき重宝する。

「じゃあ、ちょっとまってね……。うん、じゃあ、メートルで。３９８・３９・—８」

「良う候！」

砲台をゼロ地点と考え、奥行き・奥行を０地点に左右・奥行と左右の交差地点を０として高低を示している。

そして野砲の癖を熟知しているマキが、発砲する。

大きな射撃音を発生させ、先頭にいると思われる敵を木っ端みじんにする。

それと同時に敵の方からも、砲兵の攻撃をされる。

「逃げるよ」
「あいよ！」
　再装填しながら逃げる。
　逃げる方向はコウがメスで木々に印をつけているので、簡単にわかる。
　敵方からすると熊のひっかき傷にしか見えないだろう。

　小隊が撤退した先。そこは蒙古国最大の要塞。
　結月小隊は、そこまで撤退すると少々安堵するが空気がおかしいことに気づく。
　それは中将がいないという事だ。
「どういうわけだ？」
「関東軍の怪しい者は、軒並み本土へ召喚です」
「まともな人間がいるとかいう以前に、相手は本気でこっちを殺しに来ている。
　召喚とか馬鹿な事考えた奴は誰だ!?」
「大本営かと」
「チッ。で、ドイツの権威主義者である、ＫＡＩＴＯ殿。これからどうするつもりだ」
　結月はすぐに司令本部に向かい、そこで一番偉いとされる大佐に聞く。
「漸減戦を行う」
「撤退するというのか、この堅牢な重要地点をむざむざ渡すのか！」
「だが、あんな馬鹿でも、中将だ。大きく士気を削がれた兵士に、何ができると思っている？」
「それは……」
「決定だな、君たちは要塞にて殿に努めてもらう」
「は？　何を言っている、貴様」
　結月はＫＡＩＴＯをにらみつける。しかし弱い視線に彼は、何とも思わない。
　そのまま作戦を伝える。

「確かに女子供は大切だ。しかし、帝国至上主義者が多いこの場にて、貴官らを優遇するわけにはいかないのだ」
「ドイツの皮を被った傀儡め。アインザッツグルッペンに裁かれるがいい」
「そりゃどうも。Ｍｅｉｎ　Ｆｕｈｒｅｒの足でもなめるさ」
「小汚い猟犬が」
「いくらでもいえばいい」
　そういって結月はその場を去る。
　その場にたった一人しかいない大佐は、去る結月に据わったしかし鋭い眼光を向けていた。

6：大本営にて

「後藤中将、ご足労痛み入ります」
「それはいい。大事な将兵が大陸で待っている。要件を早くせよ」
「ええ、それでは……」
本土帝都にて、関東軍の怪しい人物を招集し、大規模ではないが中規模の集会をしていた。
流石にこの緊急事態にのんびりとした空気を放っている首相に、関東軍や関東軍よりの陸軍将校は苛立ちを覚える。
今回は牟田口という者が、率先して戦功を焦ったためこのようになったという事になる。
結果牟田口や周辺を取り巻く将校は、内部分裂の画策と混乱に乗じた露中米のスパイを招き入れたとして、国家保護法の観点から死刑となった。
「俺は悪くない！　全て、アイツがわるいんだ！」
「はいはい。全ては靖国か、ヴァルハラで聞いてやるよ」
こうして、浅慮で無礼な輩は四散した。
で、無駄な時間を過ごした将校は、多少の応援を要請し自身の師団が待機している場所へ戻っていった。
その時後藤中将は、少しでも結月に煮え湯を飲ませたいとして情報収集に明け暮れた。
これにより大切な時間が削られ、将来、前線が後退する要因となる。
「なあ、結月ゆかりと紲あかりについて、何か知らないか？」
「『現人神』で有名な、『縁』と『絆』の神子じゃないか。それがどうした？」
「あいつらは、男だよな」
「何言ってんだ、女に決まっているだろ」
「何？」
「何って、お前、知らねぇのか。ばっかだなぁ」
後藤はさも当然の事かのように言われ、少し頭にくる。

しかし情報を聞き出すため、ここは耐える。
「そもそも、『神子』は女だけだ。男は全員『神』になる。
もちろん天孫降臨後、神武天皇の領土の配下になっていた家族だけが、『神』の血筋を持っている。
そしてその『神』の血筋が途絶えようとすると、必ず女が生まれる。それが『神子』だ」
「つまり、血筋を途絶えさせない為か？」
「そういうこった。しかも、確実に生き、残すため、とある条件で若々しい肉体のまま子孫を残さないと老いるどころか死ねないらしい。
じっさい、『幻影の神子』『国作りの神子』が、幻・世界という苗字で生き続け現在３００歳くらいになるって聞いたことがある」
そんなこんなで話を聞いた後藤は、頭の中で結月ゆかりを滅茶苦茶に穢す計画を立てる。
そして無駄に高速で仕立て上げたその作戦は、結月小隊どころか師団全てを巻き込んだものになる。
そう、蒙古国最大で最強の要塞を失うのは、要因だけでなく故意であったりする。
ちなみに馬鹿にしたやつには、微弱のヒロポン入り高級茶葉を渡した。
どうせラリって死ぬので、今後登場しないだろう。
「さあ、Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅだ」
「敵性言語に気をつけな」
「黙れ。朝日とかいう民意改竄会社の意のままに操られるな」
彼は通りすがりの若い将校に声をかけ、福岡から南朝鮮へ渡り大陸鉄道・満州鉄道に乗って蒙古国へ急いだ。

7：戦う気持ち

「攻めてきたぞおおお!!」
「殺せ殺せ!!」
「うおおお！　天皇陛下万歳!!」
森・山岳・丘陵、と戦いにくい戦場。
そこにそびえたつ最高レベルの城塞。
それが今現在最高の資産である。
敵は中国共産党の熟達した山岳兵。
彼らは森林から、あり得ない精度で城壁上の砲撃手を射殺する。
それを看過させるわけにはいかないと、全体を見通せる良い将兵はあまりいない。
誇りを傷つけられたとして、突撃を命じる馬鹿もいる。
そんな奴らは、ことごとく神出鬼没な敵兵に殺されていった。
またここだけでなく、南部の方でも戦闘が始まっていた。
南部だという事もあって、多くの兵士が大童。
苦戦を強いられていた。
主に中将がいないということで、旅団・連隊レベルでのばらばらな戦闘にならざるを得なかった。
この事が響いてしまったようで、南部にて大損害を被っている。
そして、北の要塞では、『結月小隊』を含めた中将の本軍が戦闘している。
「今から漸減作戦を行う。この城塞の野砲を使って、敵を撃破しながら我々は後方へ撤退する。
物資に関しては運び出すか、中に爆薬を詰め込み占領され次第爆破しろ。
奴らに何も渡すな」
ＫＡＩＴＯの作戦が発令された。
今現在中将の次に階級的に偉いのは、ＫＡＩＴＯだ。
結月や紲も高いが、今は小隊長である。

臨時に上司になろうにも、小隊の主が別の人間になってしまい、確実に前線送りになるのでなれない。
だからこの場は捨て置かれることになる。
別に紲が行ってもよかったが、伍が崩れるので行けなかった。
「さて、困ったことになった……」
「ゆかり、大丈夫？」
「うん、まあ……。ふぅ……よし、行こうか」
あかりに心配されるゆかり。
彼は盛大なため息をついて、後方に集めていた１００人の小隊の前に立つ。
「これより漸減作戦の後半に移る。
我等はこの戦闘の要になる。よく聞け」
結月は戦闘立案を彼らに伝える。
それは城塞にて他の殿と共に戦闘し、敵を内部に引き寄せたら各種トラップを発動する。
そして後方にて配備された砲兵の面制圧の嵐を、この要塞に降り注がせる。
この雨の中をかいくぐって、東へ撤退するのだ。
「支援兵は先に撤退してくれ。騎兵は歩兵との歩調を合わせるため、先に丘陵の天辺に退避だ。
残り歩兵はこの要塞に敵を誘引しながら、撤退する。
皆、生きるんだ。行くぞ！」
「「応!!」」
結月は東北姉妹を先頭に、支援兵を撤退させる。
これはすぐにできた。
次は騎兵の戦略的再配置だ。こちらも強靭な足腰を持つ馬のおかげで、
共産党軍と接敵した頃には戦闘配置についた。
そして問題の歩兵たち。
初めての戦闘に、皆の心臓は悪い方向で昂っている。
「あぅあぅ……」

「大丈夫やで、葵。うちが守ったるからな」
「う、うん。でも、怖い……」
（うちはあおいのお姉ちゃんなんや。うちがしっかりせぇへんと……！）
茜は歩兵銃を握りしめて、心に誓う。
小隊の第１６班である紲の伍組は、城塞の上で一つの野砲を任されている。
主にマキが行うのだが、他の者はその護衛と周辺の戦況に対応するためである。
撤兵時に少々兵士を失ってしまったがため、その埋め合わせ。
だから野砲の扱いに長けており、『現人神』が配置されている彼らをつけたのだ。
「っし、『絆の神』がいれば、なんとかなるぜ」
「ああ。俺たちは一蓮托生だ。何人たりとも、負ける気がしねぇ」
『絆の神』がいることで、付近にいる者は『心』の距離が近いほど能力が上昇する。
勿論この『絆』の効果は、『人の神』が認めている日本人の範囲にとどまる。
そして普段ではわかりにくい絆でも、視認できる距離になるほどその効果や絆の強さを
身に染みて感じるようになる。
そのため、お互いの背中を預けられるようになり、離反者が確実に少なくなる。
このような信頼関係を強く感じていることで、他にも恩恵が出てくるのだが
いろんな効果があるので紹介できない。
そんなこんなで、日本兵や各地の日系人・同化政策により帰化した日本人は、
気持ちを昂ぶらせている。
「……敵兵、３００Ｍ先にいるよ」

紲はこの伍組と隣にいる砲撃手に聞こえるくらいの声でつぶやく。
『絆の神』は、相手の絆やそれに関係する結束力が強いほど相手自身の存在感が可視化され、それを見て周囲に伝えることで戦況を瞬時に判断させることができる。
つまり彼女には、敵の全体図が見えている。
それでも稼働率や充足度・意志・士気・作戦がなければ、戦術的勝利を収めることは至難の業。
戦争は個ではできないのがよくわかる。

「敵兵、３００先進行中！」
「射撃準備急げ！」
伝播する情報。
これが要塞全体に伝わっていく。
血気盛んで余裕ぶっていたお調子者、心配になって喚き散らしていた者。
いろんな人は、徐々に迫ってくる殺気を感じて、戦争開始と死を感じて閉口した。

昔の戦争であれば、大きな声を出して恐怖を押し殺す。
しかし近代から始まる戦争では、死を感じにくくなった。
流石に命中精度が低いと、騎兵や槍兵など中距離兵士が役立つことがあるから、死を感じないわけではない。
それで死を感じにくい遠距離だと、今度は気迫ではなく集中力と静寂が必要だ。
うるさいと場所を悟られ、何十発の銃弾を受けて死ぬ。
昔の様に刺し違えるなんてできない。
確殺の間合いは、常に手の届かないメートルの世界だ。
一部暗殺という例外もあるが、今は大体こんな感じ。
「茜ちゃん、葵ちゃん、マキちゃん、コウ君」
子供の４人に、優しく声をかける紲。
「大丈夫。どんなことがあっても、私が守るから。だから、背中は任せ

て、がんがんやっちゃえ。
後悔は戦闘が終わってからにしよ？」
彼は男とは思えない表情で、彼らを勇気づける。
流石に軍医であるコウや普段悪ぶっているマキも、表情を強張らせていた。
茜は気負いすぎて、葵は恐怖で、ガクガクと震えている。
葵は泣いてさえいる。
だから紲は皆に触れる。
そう、手に。
北部の気温が低い土地にて、彼の温かい手は彼らの心を一瞬溶かす。
そう、一瞬だけだ。
だがそれでいい。
コウやマキの不安と恐怖にやられそうな顔が、少し前向きなったようで決意に満ちた表情になる。
茜も口を締めて、やる気をあふれ出させる。
葵は……まだ、体を強張らせている。
でも……。
「葵。大丈夫。お姉ちゃんはここにおるよ。そんでマキちゃんやコウ君・紲の神様もおる。みんな一緒や。せやから葵はそんな心配せぇへんでええで。
一蓮托生や！」
白い息を吐きながら、笑顔で茜は葵を元気づける。
その様子にマキはいたずらっ子の様にはにかみ、コウもやってやろうぜと言わんばかりの表情をする。
紲も微笑む。
皆葵の方を見て、この伍組全員で生き延びようと語り掛ける。
「み、皆……うん、頑張る、私――――」
葵が言葉を口にしようとしたその時、隣の砲撃手と共に砲台が爆散した。

８：撤退

「――み、皆……うん、頑張る、私――」
葵が言葉を口にしようとしたその時、隣の砲撃手と共に砲台が爆散する。
紲意外がびっくりし、炎に包まれ崩れ落ちる数人の人だったモノと周囲に散らばる部品。
高温により真っ赤になった砲身がひしゃげており、いかに敵の一撃が熾烈なものか伺わせる。
「砲撃だ!!　撃ち返せ!!」
誰かが言うよりも先に、要塞の上にある砲台が一斉に火を噴く。
砲台の他にも銃撃音と弓矢の擦れる音も聞こえる。
「紲様、ＫＡＩＴＯ殿より本隊が来ているかについてですが」
「うん。まだ、敵は奥に潜んでるよ」
城壁を走り回っている通信兵が、紲の下にきて何やら情報を貰っている。
そんな最中一番最初に気を取り戻したマキが、城壁野砲で敵兵がいると思われる場所を攻撃する。
「マキちゃん、１４位左」
「ああ」
一人で砲弾の詰め替えをして射撃するまで１０秒もない。
そんな怪力な彼女は、紲と連携して誰よりも戦果を挙げている。
このまま耐えればどうにでもなりそうだ。
だというのに、なぜ撤退するのだろうか。
その理由はＫＡＩＴＯがドイツ人だからこそ、である。
ドイツから中国の技術レベルを、そのまま資料で読んで日本帝国に再度来日した。
だからその脅威を十二分に知っている。
そう、別に中将が不在とかどうでもよかった。
なんとしてでも、日本とドイツが枢軸国として同盟関係であり続けるためには、

少しでも日本軍を温存しておかなければならない。
結果的に、彼は撤退を余儀なくされた。
そしてそれを背景とした技術力は、先ほど城壁上にある野砲にされた攻撃の正体でもある。
その正体は……。

「お、おい。なんだよあれ……」
「黒い……矢……？」
「違うぞ、あれは……砲弾だあああ!!??!?」
そういって城塞上にある建物や砲台、迫撃砲・榴弾砲が破壊されていった。
本来ならばあり得ない。
だが前線から５００Ｍ離れた土地にある後方補給路が破壊されたことから見れば、
現実離れとは言えない。
全くの現実であり、相手の実力なのだ。
そしてそれは技術面において、兵器の破壊力にしっかり表れる。
「紲様。ＫＡＩＴＯ殿より、あれはロケットといって帝国が作っているジャイロ制御式噴進弾より、
精度と威力が高く飛距離もあるということ……！
これより漸減作戦の開始を始めるとのことです」
「分かりました。幸い、敵の本隊も近づいてきていますし、やった方がいいと思いますよ？」
「……」
通信兵は何も言わず去った。
顔色は悪くないが、歯を食いしばっている。
この漸減作戦は、立案後の研磨時に発表されていない事案があるのではないか、と紲は思った。
それもそのはず、彼の視界には敵の発揚の他になにやらどす黒い液体状のものが周辺に散布されているからだ。
これを見て彼はただ訝しんだだけだ。

「お、おね……うぷっ……」
「葵っ！」
人が木っ端になり、焼ける臭いをかぐのは初めての事。
更に地獄と思える様相を見て、葵は吐瀉するのを防げなかった。
胃の中はからっぽなので、さすがに一部胃酸しか出てこなかった。
「マキ、どうだ？」
「納屋においてたやつより精度が低すぎる。思ったより使えねぇよ、これ」
そういってマキは、近くにいるコウを抱えて飛びのく。
その瞬間扱っていた野砲が爆散した。
一部の破片が皮膚や服を掠めるが、致命傷になっていない。
服の一部が燻っただけだ。
「皆、撤退するよ。もう、この城塞は体を成していないからね」
「じゃ、アタシは砲台もってくか」
「マキさんのは撤退先の出口付近に置いてるから大丈夫だよ」
そう会話していると、下の方で日本語と中国語の喧噪が聞こえてきた。
その時丁度偵察兵の一人が走ってきた。
「相手の砲撃にて、城門が破壊。撤退せよ」
「わかった。じゃ、皆、行くよ」
偵察兵は要約してしゃべって次のところへ行った。
しかし敵の爆撃に巻き込まれて馬もろとも、肉体がちぎれてしまい泣き叫び痙攣して死んだ。
「やだ、やだ……おうち帰りたい……」
「葵。しっかりして、葵っ！　逃げるよ！」
「やった、帰れる……」
恐怖で足腰に力が入っていなかった葵だが、撤退の司令を聞いてふらふらしながら立ち上がる。
しかし吐瀉や心労で、走れもしない葵。
それを見て、コウが抱き上げた。
「俺が連れていく。茜、援護頼む」

「え、うん。お願いするで！」
「任された。マキ、紲さん、行くぞ！」
率先して動くコウ。
銃は茜に持たせて、撤退を開始する。
「男らしいことしちゃって、まぁ」
「青春だね」
「聞こえてんぞ、コラ」
ただの足手まといを連れていくだけだ、というようなコウ。
だが紲とマキにとって、それは別の何かに見えて仕方ないようだ。
「葵とコウ君は、うちが守る！」
そうして撤退が始まった。

9：作戦結果

全員撤退が完了したが、今は暗い雰囲気である。
まずは結月が真っ先に司令本部に招集されて、声が聞けないということ。
第二に漸減作戦はいいものの、追手に対して日本軍の苛烈な迫撃榴弾による鉄の雨が降ったこと。
これで撤退が遅れた仲間の四肢が吹っ飛んだ。
第三に、城塞を爆発で吹き飛ばし、本隊を城塞前に撤いていた化学燃料で燃やしたが、
翌日立派な城塞に建て替えられていた事。
第四に、撤退支援で戦術爆撃機や護衛が出てきたが、誘導する敵の対空砲のせいで次々と落ちたこと。
第五に、茜が負傷したこと。

「お姉ちゃんっ！　おねえちゃん！」
「邪魔だ葵。マキ、こいつを抑えとけ」
「おいまて、コウ。それ、ヒロポンじゃねぇか！」
「薄めて使えば、神経系を麻痺させる。いわゆる麻酔にできるんだよ。ミスればラリっちまうがな」
そういって、葵をマキに羽交い締めにさせて野営地で待機と休息をさせた。
茜は腹を抑えて苦しく悶えている。しかし、動けば動くほど血がとめどなく溢れてしまうので、
早急に手当てをしなければならない。
「さて、茜。俺の軍医もとい、神医しての力、みせてやるよ。
華佗が末裔、『解剖学の神』。参る」
彼は他の神の力を利用し、自身の解剖に利用できる。
例えば『縁』や『絆』は、糸や細胞結合に使用できる。『火』は焼き、『日』は温める。
色々と使えるのだが、その神が近くにいないといけない。

勿論、神子でも構わない。
「というわけで、紲さんはそこにいてください」
「うん。君の力、見せてもらうね」
そういってコウは、敵の銃弾が純鉄性であることを鑑みて、電磁石に大量の電気を送って強磁性を利用し弾丸を摘出した。
「……えええ!!?」
「これが、解剖学（化学）の力だ」
「そもそも電気って……」
驚愕し大声を上げる紲が周囲を見渡すと、彼を見る軍医の方が多数。
そして彼らは口を開いた。
「どーも、『摩擦の神』でーす」
「どーも、『静電気の神』です」
「やあ、『負極の神』です」
「俺は『正極の神』だ」
「自分は『磁性の神』だ」
自己主張の激しい神様たち。
そもそも医療班に神様が集まっているのは、神の力が強大だからであるという事と
人的資源が貴重だからということ。
だから日本国は、医療関係に色々と神様を配属するのだ。
しかも神であるという事は、他にも神がいることなので他の戦線にもそれぞれ彼らがいるということに他ならない。
たった一人なのは、『神子』だけである。
ちなみに、万物の神様がいるので、八百万以上の神様が存在していることになる。
これで人的資源が不足しているなんていえば、小国に怒られそうな感じだ。
しかし今現在日本帝国が相手している敵を、もう一度確認してほしい。
敵は日本帝国より数世代先を行く国共合作をした、中国大陸全てで

ある。
いまだに１９００年代であれど、黄河と長江によってもたらされる肥沃な大地は
多くの人口を産み落とした。
現状技術と兵力で負けているので、これに勝つには神様の力を存分に活用しなければならない。
もしも敗北して、満蒙やほかの戦略的要衝が陥落すれば、本土まで攻め込まれるだろう。
この時代、既に中国は複葉機を卒業し、単葉機を採用している。
更に屈強なファシズムドイツ勢力が、総統をして危険だといわしめるほど彼らは進んでいる。
そしてドイツが選んだ友好国は、アブノーマルでなくクトゥルフ的神様の国。
戦争に必要な物は全て揃っているといわれている国共合作軍。
彼らに勝つことは不可能なのだろうか？
さすがに全戦全敗はないだろう。
日本という国は、大きな列島にて構成されている精神の国。
昔からごく少数の採算が取れない資源が、大量に埋まっているだけだった。
江戸時代には金銀銅を使って、外国の技術を買っていたようだが、それはほぼない。
よって日本は国の存亡を、人命を使いつぶして保全するようになった。
だから人的資源が少ないといえる。
話を戻そう。日本は列島という観点から見てわかるように、海洋に囲まれている。
地政学的な事は話さないが、大昔から日本海バリアのおかげで様々な敵国の侵略を退けてきた。
一番大きな出来事と言えば、元寇といわれるもの。
二度にわたって敢行された、大規模上陸作戦。
――チンギスハンが東方異聞録を読んで、黄金の国ジパングとして

興味を持った。
対馬から渡ってきたが、当時ぶっつぶされたばかりで大陸国の朝鮮・中国人が船になれておらず、簡単に荒波で転覆入水し戦闘にすらならなかった。
神風という、当時の台風が直撃した。
海賊や倭寇の対策・数々の水上戦をもって、上陸作戦など水際作戦に興味を抱いていた天皇や北条らが、山城や堤防・長距離にわたる石垣を作っていた――
――等、上記の理由が混ざって、結果的に勝利した歴史的大勝利のアレだ。
（尚、将軍様は活躍した兵士や将軍の恩賞を御恩と奉公に基づいて、苦渋の決断を迫られた模様。）

つまるところ、海こそが最大の防壁である。
広大な海を制海権として手中に収めておくことで、気休め程度だが国防をすることは可能である。
流石に朝鮮半島を取られれば、福岡や対馬で徹底抗戦しなければならないが……。
え、勝利方法？
物量でなんとかすればいいんじゃないかな。

１０：束の間の休息

「これで処方は完了した」
　コウは茜の腹部に包帯を巻き終えた。
「ありがとな、コウ君」
「気にするな。とにかく、今日は安静にしておくんだ。いいな？」
「うん。あ、葵と会いたいんやけど……」
「俺はこれから患者項目に記さなきゃいけないんだが……。
　紲さん。お願いできますか？」
「うん、私に任せといて」
　痛みと麻酔で倦怠感が出て、茜は休憩といいながら深い眠りに落ちていった。
　また汗などは紲がぬぐい取っているので、無駄な垢の増加や腹下しを事前に防いでいる。
　ただ服は撤退から一度も変更していない。
　ここはまだ最前線だ。気は抜けない。
「寝ちゃったけど、いいの？」
「無事だという状況報告位はやっといたほうが、アイツの精神的にもいいだろ」
　ちゃちゃっと支度を整え、患者帳簿に情報を書いていくコウ。
　彼の進言を聞いて、紲はマキと葵の下へ向かう。

「食べてください」
「ごめん。私、今……食べる気がしないの」
　紲が向かった先、そこでは補給兵の東北姉妹の妹の方が葵に食事をさせようとしている所だ。
　紲は経過を見守ることに徹する。
「そんなことはどうでもいいので、食べてください」
　簡単な食事を器に入れて、膳をふるまう。
　しかし葵は脚を腕で抱え、頭を伏せている。

隣にいるはずのマキは、どこかに行ってしまっているようだ。
「ほんと、ごめんなさい……」
拒否反応を示す葵に、妹であるきりたんは青筋を額に浮かび上がらせる。
とても立腹であるご様子。
「少しでもいいから食べてください」
「いらない」
そういうと、膳を置いて去ろうとしたきりたんは、大きくため息を吐く。
ぎりっと歯を噛みしめ、苛立ちを隠し切れない。
しかし表に言葉を出すことはなく、そのまま膳を置いて去った。
一部始終を見た紲は、きりたんの方へ足を向ける。
「東北さん」
「なんのようですか、親の七光り」
「え？」
「いえ、なんでもありません。如何致しましたか？」
冷めた目で言うがすぐに訂正し、普段通りの装いを見せる。
流石に紲もいわれのない悪態に戸惑ってしまったが、たまによくある神様じゃない人の妬みだと受け取った。
「えーと、ごめんね？　私の伍組なんだけど、あの子のお姉さんが怪我しちゃって」
「ああ、それでですか。まあ、仕方ないですよ。　それが殺し合いなんですから」
「っ!?」
淡々と、しかしそれを当然というように受け取っているきりたんは、平然とソレを口に出した。
紲は彼女から一瞬伺える闇を感じ取って、閉口してしまった。
姉に甘えることなく、見た目不相応なその反応。それは間違いのない歪なもの。
紲は思わず閉口してしまったが、話しかけたのならば何か反応しないといけないと思い、言葉を口にした。

「あ、えと、その、葵ちゃんにはちゃんと食べてもらいますので。食べてなかったら、他の方にでもあげますね……あはは」
少しの沈黙。
「そうですか」
表情をいつも通りの無表情へ切り替えると、踵を返して補給場へと帰っていった。
紲はへんな緊張をしていたが、彼女が去るという事で緊張を解くことができるようになった。
しかし、立ち去ろうとして数歩あるいた彼女が、突然歩みを止める。
何かまずいことでもあったのか、紲はどきっとする。
そしてきりたんは、紲の方へ少し振り向く。
振り向いて紲、彼は身震いする。
口が開くことに、こんなに恐怖するのは初めてだといわんばかりに、過呼吸になる。
「あまりふざけたことを言うと、明日の食事に貴方が並ぶかもしれませんよ」
子供とは思えない殺気を、すわった目で紲を貫いた。
きりたんはほかの子とは一線を画した雰囲気を持ち、そのまま帰っていった。

彼が彼女が完全に視界から外れると、緊張がほどけたのかその場に座り込む。
呼吸を落ち着かせるため、深呼吸をするとともに額の汗を袖でぬぐい取る。
「……ゆかり兄さんの小隊……凄いね……」
ここにいない兄への賛辞を今ここで送り、葵のところへ帰っていった。

11：威力偵察

ここはとある戦場。
いや、厳密にいえば違うかもしれない。
だがそこにいる者にとっては、確実に死が待ち受ける戦場でしかないのだ。
「共に偵察に行きたいと？」
「応。あたしはマキってんだ。よろしくな、おっさん」
「おっさんとはなんと無礼なッ！　粛清――」
「まあ君、落ち着き給え」
「しかし……」
「マキ。君は兵士とはいえ、偵察兵ではない。ついてこなくていいんだぞ？」
「あたしが行きたいんだ！」
「別に構わんが、どんな理由で行きたいんだ？」
「戦場で使う砲台を探しに、だ」
「確かに面制圧と物量は必要だ。でも、今はいらないんじゃないかな？」
「何言ってんだ？　あたしの武器はその大砲だ！」
「マキ……なるほど、結月殿の小隊か。面白い、共に行こう」
「やった！」
「ああ、閣下の癖が始まった……」
「癖ではない。帝国の輝かしい未来のためだ！
　っと、その前に、自己紹介を」
「あたしは弦巻マキ。　砲台を武器に使うのが、あたし流さ！」
「聞き及んでいるよ。私は陸軍参謀の辻　政信だ。よろしく、マキ」
「おう、おっさん！」
「だから、おっさんではないとッ――！」
「落ち着き給え、佐藤勝郎君。これより共に、威力偵察に向かうのだ。
　これに反対する者が多い中で、この一筋の光。

同じような意志を持つ者がいるというだけで、非常に頼もしいではないか」
「くっ……！　わかりました、辻さんがいうなら」
「では、ゆこうぞ！　参謀とは、最前線で戦う事と見つけたり！」
「ぎゅんぎゅん行くぞー！」
辻正信参謀と佐藤勝郎補佐。
二人は数少ない威力偵察の体現者である。
作戦のために地図を持ち出すのは当然。
そこに情報をつぎ込み、作戦立案をするというのは二流でしかない。
辻参謀と佐藤補佐は、そこに前線にて敵の配置を直接見てその道中邪魔になりそうな村へ行く。
そこで行うのは、貧しい人々に対して情報収集と貴重な資材を使って炊き出しをすること。
これにより現地民が最悪敵にならなくなり、壊走時でも隠れ蓑として使えるようになる。
更に満蒙効果で、中華人民が共に戦ってくれることもある。
これが可能なのは、経験と知識・情勢の他に、辻が『作戦の神』・佐藤が『親善の神』であることが理由である。
作戦とは。それは戦略・戦術、立案からそれに含まれる過程全てが、『作戦』と認められる範囲のことだ。
これに当てはまるものは、裏工作や内偵を含めた行動にも補正がかかり動きやすく成功もしやすくなる。

親善とは。これは仲良くなることだ。絆は心の距離で、縁は血縁や時世が関与するもの。
故に行動をすればするほど、他人から認められていくのだ。
勿論それは相手からして、良いことと思われなければならない。
当然のことだが、善悪ともに使うべき場所は、本人の血脈が代々受け継いでいる経験録に描かれてる。

さて、マキ・辻参謀・佐藤補佐・山岳兵二連隊は、中国奥地に潜入成功した。
場所は確定的ではないが、近くにダムがあることを地元住民から聞き出した。
「ダムの下流か……」
「ということは、ダムを破壊して進軍の邪魔するかもねぇ」
辻参謀はいきなりの事を口に出すマキに、目を見開いた。
驚愕。その一言だ。頭に浮かんだ予想を、簡単に口に出す彼女。
「マキ。すごい洞察力だな」
「それほどでもないよぉ？　あ、高射砲めっけ！　おばあさん、これ貰うね！」
難なく言葉の壁を突破し、高射砲を取り外して台車に乗っけるという魔改造をするマキ。
流石の行動力に、脱帽した。
まあ実際は爆笑程度だったが。
「辻参謀、南より国民党軍がやってきてます」
「うむ。相分かった。全員撤収だ！」
「はっ！」
「分かったよ！」
今日の威力偵察は終了した。
情報はそろいにそろった。
威力偵察ほどではないが、双発電征を使って中国の配置とか見た結果。
本隊を含んだほとんどが、北上していることを掴んだ。
そしてこれを確認し、関東軍と満蒙合作軍は北上してくる国共合作軍を要塞や山岳に立てこもり、奴らを誘引しはりつかせておくことを作戦とした。
また今回の偵察で、内陸のダム付近の中国人と接触し日本軍の通過を黙認するよう依頼出来た。
これらの情報や作戦を、司令本部に送り付ける。

そこには『異常の神』である、石原莞爾ら関東軍の重鎮に届く。
中国に対するために、本土からの上陸部隊は上海や台湾の西部・香港やマカオ周辺から揚陸することを
決定づける。
本土は八百万の神々により、生産体制を含んだ効率化や生産品の過剰生産を行い備蓄できている。
技術がなくとも、有り余る物資と国庫を傾け注力した海軍で、どうにか優勢に持っていきたいところだ。
既に戦線が打開されているが、本土奪回や迫りくる脅威を排除するために北上している敵軍。
おかげで比較的楽に、制圧ができそうだ。

１２：会議室

「結月　ゆかり。ただいま参上しました」
そういって司令本部の部屋に来たが、誰もいない。
許可を貰っていないが、奥へ歩き周辺を見る。
すると会議の机の上に、手で持てるような小さな蓋つきの桶があった。
彼は自分の力を使って、桶の中身を知ろうとする。
しかし全く透過できず、見るのを諦め蓋を開ける。
まあ、誰もいないから別に大丈夫だろう、と安易な気持ちで開けた。
だが蓋を少しずらすと、異臭が彼の鼻腔を反応させる。
嫌な臭いに嫌悪感を抱き、表情をゆがめる。
本来ならば、そこで蓋を閉じればよかったのだが、今の彼は好奇心に支配されている。
故に開けてしまった。
「う……」
あまりの異臭。シュールストレミングもかくやというにほい。
腕で鼻を隠し、中を見る。
そこにあるのは……。

「素晴らしい漬物だろう？　結月ゆかり」
「っ！」
結月。彼はバッと体を桶から離れさせ、聞いたことのある聲の方へ体ごと反応した。
そこにはしたり顔の後藤中将が、通路の角から覗き見ているのを確認。
にやけながら通路から出てくる彼は、結月の下へ偉そうに歩いて出てくる。
「これは一体なんですか」

「わかっているだろう？　ＫＡＩＴＯだ」
「……」
いったい何のために、と結月は思いつつ中将をにらみつける。
実際行動に移せる上級将校がいない中、優秀な情報を持つ人間をむざむざ殺すのは
帝国軍人としていかなるものか。
それを理解しているのか、と問いただしたくなる。
だが必死に抑える。
一応彼はこの戦線に於いて、最高司令官であるからだ。
「いやぁ、彼のような優秀な人材は惜しい。
よって、情報を全て吐かせたうえで、軍法会議にかけた」
いけしゃあしゃあと、と結月は思う。
ギリっと奥歯を噛みしめ、苛立ちと怒りを露わにする。
「おっと？　その様子だと、彼の事を認めていたようだが……。
しかたあるまい。これも帝国のためだ」
「そんな建前はどうでもいいでしょう。目的は何ですか」
「ククク……」
先ほどから仰々しく高説を宣う愚か者に、変な感覚を覚えた結月。
ＫＡＩＴＯの首がわざわざ塩漬けにされていて、周囲に人払いをさせておいて何を考えているか。
ただこんな世間話のような無駄話をしに来たわけじゃない。
作戦終了時はまだ生きていた。
しかし作戦が終わって一週間。
何も音沙汰がない。
違和感を感じて訪れれば、この始末。
気持ち悪い仕草と口調で以って、結月を迎え入れた中将の目的とは。
「さて。今回のＫＡＩＴＯ君の処刑理由というのはだね。
敵前逃亡と勝手な漸減作戦をしたことだ。
更に作戦内で、わが軍にとって非常に高価なガソリンを使われた。
わざわざオクタン価の高いやつをだ」

「しかし作戦は上手く行った。後藤中将のために、ＫＡＩＴＯ殿は奮闘したんだぞ。
その対価がこれか！　真の戦犯は貴様だ、後藤中将！」
指で指し示す結月に、後藤中将は気持ち悪い笑いを上げる。
「ハハハハハ！　そこまで言うか、名誉と誇りに満ち溢れる帝国軍人に。
たかが娘如きが。　というわけで、お前も共謀罪として小隊解散だ。
本日付で、俺の配下ってことでよろしく」
計画性のない無茶苦茶な指示。
これには結月も、堪忍袋の緒が切れる。
「貴様。黙っておけば男だの女だの。我々は帝国軍人だ、そこに男女の差はない。
天皇陛下と日章旗と日乃本のために、身命を賭して全てを捧げ民と家族を守るのが我々の仕事だ。
そこに人間も神も、全く格差はない。
そんな死を覚悟をしている神や人を無下に、努力すら踏みつぶす貴様は鬼畜以下だ！
鬼畜米英にすら勝る畜生に過ぎない！
貴様はここで野垂れ死に、無様な死に様をさらけ出せ！」
そういって帯刀してある日本刀に手をかける結月。
そのまま攻撃を仕掛けようと、居合を行おうとする。
「残念だったな？」
「かはっ!?」
だが結月の刀は相手に届かなかった。
間合いで言えば近づけたが、後藤にはかすりもしなかった。
「合気道ってしってっか？知らねえよなあ？」
そう応えるのと同時に、結月の鳩尾［みぞおち］から拳を引いて顎に拳を当てる。
「げ、が……ゴホッカホッ」

急激な眩暈と呼吸困難が結月を襲う。
そして脳震盪となって、彼女はその場に崩れ落ちる。
それを見て後藤は、配下の者を呼んで運ばせた。

13：縁と紲の神子

「グ……（こ……ここは……？　僕は、何をしていたんだっけ……）」
意識を取り戻した結月は、うっすらと目を開ける。
まだ腹部に圧力をかけられた違和感と拳を当てられた顎が傷む中、周囲を確認。
周辺は真っ暗で何も見えなかった。
また結月ゆかり、彼自身四肢が拘束されていることを、感覚で知ることができた。
「とにかく……（ここからでないと……）」
身じろぎをすると、体に当たるはずの何かがないことに気づく。
「！　嘘だ。何で服が……」
結月は自身が全裸だということを、少し動いて知る。
後藤中将の好色、意識の刈り取り、司令本部。
これらの要素をひっくるめると、行われるのは……。
「まさか、後藤の奴！」
「はい、ご名答～」
そういって拍手をして、照明が薄暗くともされた。
それにより、中将と結月がその光の下さらされる。
「な!?　貴様っ！」
「何。今までの仕返しというのと、実際神子がどういう感じなのか、知りたいんだよ、俺はなあ！」
中将は結月に襲い掛かった。
結月は中将のやり口を目にして、今までの被害者もこのようにしてきたのかという怒りが湧いた。
攻勢に転じている中将は、女を喜ばす方法に富んでいるのか男勝りな結月に嬌声を出させる。
薄暗く、お互いが出す空気の振動しか耳に入らない密室。
おかしな程今の状況に合っている為か、結月は徐々にその状況に入り込んでしまっていく。

だからといって、意識を完全に移行させるわけにはいかない。
彼女や彼ら、満蒙二世代のためにも、ここから抜け出さなければならない。
「乗ってきたな」
「いいから、もっとして……」
中将はにやけながら、なおも行為を続ける。
実のこと中将は、結月に感応性を上昇させる薬を盛っているのだ。
麻薬ではなく、とある神に作り出させた強力な物。
よって、結月も自身の体の暑さや昂ぶりに、若干の不安を感じている。
薬によってもたらされる偽りの感情と感覚。
これは徐々に結月を、快楽の海へと沈めていく。
快楽は欲望と直結し、抑圧された環境下で育てられた結月の中の性を目覚めさせる。
人として、生物として、その本能を刺激させる。
彼は彼女となり、中将の望みを果たすことになる。
彼女は元に戻らないくらい、それに甘んじてしまう。
中将の手腕は、もっとそれを軍事に注げよと言わんばかりに高い。
「来て……」
「いいだろう……!」
一時間ほどくんずほぐれつの連結をしている。
抵抗はなく、今では快楽の餌食となり、感情も思考も欲望の海に解けてしまった。
中将は自身の肉体の昂ぶりを、結月にぶつけようと必死に揺する。
確実に命の素を命の種へ届けようと、肉体を密接にさせた。
結月もそれに従い、手足を使って逃さないようにする。
最後は接吻をした。
そして、中将は満足……していなかった。
この肉欲の宴は、３時間ほど続けられた。

そしてその最後。その時に、喜劇は起こる。

「う……グッ!?」

中将に乗っかって、魅惑の舞を踊ろうと体位を変更する。

この時、結月は中将の首をしめ、体を転げさせ頸椎にダメージを与える。

そして最後は結月……彼女が座っていた台座にぶつけ、意識を刈り取りながら首を抑圧する。

「オゴッ……」

何かが砕けた音がした。

結月はしばらく首を強く締め付けた後、自身の汚れた下着を中将の口に突っ込み

この中将だったモノから抜け出す。

「ふぅ……」

発汗作用や激しい運動によって、成分がさっさと抜けたことにより結月は正気を取り戻したのだ。

彼女はお腹に力を入れて、内部に溜まった不要な粘着物を外部へ捨てる。

また遺体の腰から鍵を手に入れて、この薄暗いところから出る。

出た後、周囲を探って自身の神の力を使う。

『縁』。

これにより、どこにだれがいるかわかってしまう。

神人、イデオロギー、左右、急進穏健、善悪、死生、男女……。

これを使って、自分の衣服を探し出し着用。

後は脱出するだけ。

「『姉』さん……」

「あかり。逃げるよ」

「うん。案内は任せて」

紲あかり。彼もまた、彼女であった。

あかりは周囲にいる中将派の人間を、格闘術にて殺してゆかりの逃走を助ける。
本来ならば何かしら問題があるはずだ。
しかしそれはなかった。
なぜなら……。

「支那の空挺だ！　全員退避しろ！
おい、お前ら中将はどこへ行った!?」
「わからない。我等も探しているが、検討がつかん」
「ちっ」
中将派ではないが、関東軍の中で顔を利かせている人間。
彼はすぐに要塞内通路を走っていった。
この緊急事態に、一部の者は混乱している。
指揮系統も上手くいっていない。
そんな中まだ体を清潔にしていない結月は、紲の案内をへて小隊の下へたどり着く。
すでに全員撤退準備ができているようだ。
「皆、逃げるよ。ついてきて」
「「はいっ！」」

司令本部からすぐに撤退にこぎつける。
それは伍長らとあかりの支援あってのものだった。
今日もまた、前線が退いていく。
それでも確実に勝利に近づいていくものなのだ。

打ち切り：独逸にて

「諸君、これよりダンツィヒか戦争か。戦略立案してもらいたい。
私は諜報機関の者と話してくる」
「ハイルヒトラー！」
ここはドイツ――Ｄｅｕｔｓｃｈｌａｎｄ――の参謀本部。
そこにヒトラーが訪れ、今後の作戦について簡単に説明。
そして彼はまた別の部署に、今後の動向について話をつけるため足を動かす。
「あら、総統閣下ではありませんか」
若々しい女性の声が、ヒトラーの後方から掛けられる。
彼はわかりやすい驚愕を体現させ、後ろを振りむく。
特徴的な頭髪色と両サイドに頭髪を結んだ、ツインテールというひも結び形態を用いた彼女。
「日系アーリア人の二重工作員、初音未来ではないか」
「まあ、ミクと呼んでくれないのですね？」
「今は仕事中だ。あとに――」
ミクは固い彼の意志表示に反抗し、彼の腕に抱き着く。
女性の柔らかい肌が触れる。彼はその感覚を耐え、近くの本日使用しない会議室に入った。

「それで、報告はなんだ」
「焦らないでください、殿下。無用な焦燥は、死を早めますわ」
艶やかな口調と声・彼女のしぐさや容姿も相まって、彼はひたすら耐える。
中身は優秀なくせに、外見は色々と卑怯なのだ。
一回深呼吸をして、煩悩をいったん頭の隅に置き彼女と話す。

「報告を頼む」
「一つ目……。海斗が死んだわ」

「何？　アイツは優秀な頭脳と知識を持った、元ユダヤの名誉アーリア人だぞ。
　そんな簡単に……」
「彼の脳内情報は私の情報部を使って、全部ダウンロードしたわ」
「そうか」
　お互いの唇が至近となるほどまで、彼女は顔を近づける。
　余裕の大人の女性として、男性であるヒトラーの情を昂らせたいのか
　色々と辛い行動をしてくる。
　しかしそれと裏腹かのように、ミクが行うその工作内容は普通の工作員でも不可能な気違いの領域に達している。
「二つ目。私の歌で、フランスにユダヤ排斥をさせたわ」
「……そうか」
　しばらく彼は黙り、シュリーフェンが唱えた戦略立案を指示しようかと熟考している。
　だがその思考は突然断ち切られる。
「総統閣下。ご褒美を下さらない？」
「……仮にも、Ｊａｐａｎ―ヤパン―の神子ではないのか？」
「『神』ですわ。それに、この行為はお互いの傷を埋め合わせるもの。他意はありませんわ、アドルフ君」
「美大からの落伍者を歌で盛り立て、ナチ党の党首にさせる君の実力はすごいさ。
　だがそれをなぜ私に担わせた？」
　ヒトラーは、肌を曝け出し欲情を掻き立てる姿になる未来に抗議する。
　その言葉は場をしらけさせる効果は全くない。
　寧ろ彼はいじられているのである。こうやって言い返すのも、ヒトラーの嫌味であった。
「『歌』の可能性と『神』の国の未来のためですわ」
「それだけのために、私に国を背負わせたのか」
「それもありますが……歌と詩では表せない、その表現ができる総統

に惹かれただけです。んっ……」
生物として大切な行為も、人間にかかれば娯楽と化する。
しかしただの娯楽であっても、彼らにとってそれは信頼か、
傷のなめあいをして心の隙間を埋め合わせるだけに過ぎない。
「だが私も結局、お前に取り巻く男と変わらないぞ」
「ええ。ですが、本質は違いますわ、ヒトラーさん」
「やめろ……」
「かわいいわ、ヒトラーさん……」
快楽と欲情が場を支配する。だがそこに実感はともなっていない。
ただむなしい気持ちが、交錯するだけだ。
今を必死に生きるが、それは過去を断ち切る為、逃げるためにしている
あがきだ。
だから彼らは後ろを見ず、前に進み続けようとする。
その道は未知である。だが逃げるわけにはいかない。賽は投げられたのだ。
「お前は少なくとも人だ。神ではない」
「ですが、私は神です。人ではありませんわ。バケモノです……」
「未来。私を救い上げてくれたのは、神でもない。人だ。
だからこそ、私はお前が欲しい」
「既に全てを授けているではありませんか」
二人だけの空間。
物だけ溢れかえる静寂な空間は、二人が醸し出す雰囲気をさらに強調する。
彼らは何年に一度逢えることはあるが、こうして二人きりになったことはない。
今はドイツの重大な事のため、皆が会議室に引きこもっている。
だからこそ、こうやって蜜月の思いをしていられるんだ。
「私は神や人ではなく、初音未来。お前の心が欲しいのだ。
だから、戦争が終われば、私と婚約してほしい……」
「変な事を言わないでください。死んじゃいます」

「本気だ！」
「ひゃっ!?」
空気は濃厚になればなるほど、そこには狂気しかなくなる。
そして飲まれれば呑まれるほど、深淵に嵌り抜け出せなくなってしまう。
その浅い溝は、深い奈落となって二人を闇へと引きずり込む。
「閣下。だめ、中は……！」
「私はすでに、何千万と殺している。頼れるのは、未来……お前しかいないんだ!!」
彼の言葉に未来は顔を紅潮させ、流れに身を任せた。
……
「……」
「……また、逢おう」
「ええ、楽しみにしておりますわ」
夕べではないが、お楽しみだった二人の顔はただの一般人の逢瀬［おうせ］でしかない。
だが外に出れば、戦場となる。
血はつながっていないが、手はつながっている。
手はつながっていないが、心が繋がっている。
「我々は命と未来を、この手でつかみ取る……！」
ナチ党党首、ナチズムであり国粋主義［ｆａｓｃｉｓｍ］、アドルフ・ヒトラーは、固い決意をもって会議室を後にした。
そして初音未来も、名誉アーリア人、日系独逸人として二重工作を行うため現場へと足早に向かう。
未来はその現場にたどり着く。
そこには白髪の女性が、二人たたずんでいた。
「依愛［ＩＡ］、王［ＯＮＥ］。行きますわよ」

「まずは説明をしてくれないと、わかりません」
「中華民国をファシズムに染め上げるのです」
そういうと、依愛はその無表情を取り作る表情筋がピクッと動かせた。
更に王も鋭い目つきで、未来を見る。
「あら、私に逆らう気？　依愛。貴方の妹は、この私が中国で買われていたのを買い戻したのよ？
従属の意志をもって、仕えないと」
そういって、未来は依愛の首に巻かれている爆弾付きの首輪を撫でる。
依愛は屈辱と後悔の念でいっぱいになり、その表情を怒りから悔しみに変化させる。
王も名付けられた名前を捨て、当時の育ておやであった王家から家名を借りている。
「では。内部工作と行きますわ。私は中華民国。依愛は中国共産党。王は山西を頼みます」
「わかった」
「わかりました」
そういって、三人は別の道を歩き出す。

――ドイツの未来と日本の栄光のために――
そう、初音未来は小さく呟いて、その闇で包まれた細い道を歩いていく。
先にあるのは希望か絶望か。
それは努力と運次第。彼らは命を懸けて、成功を手繰り寄せる。
たとえ、その道が血に染まっていようとも。